

日本地衣学会 ニュースレター

No.123

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 第12回観察会（長野県上田市・菅平高原）の報告

／木下 靖浩・安齊 唯夫・陶山 舞……………457
菅平高原地衣観察会に参加して／泉 宏子……………459

第12回観察会（長野県上田市・菅平高原）の報告

Report of the 12th JSL Field Meeting at Ueda-shi, Nagano-ken, central Japan/ by KINOSHITA Yasuhiro, ANZAI Tadao & SUYAMA Mai

>>>> 木下 靖浩¹⁾・安齊 唯夫¹⁾・陶山 舞²⁾： 1) 地域活性化委員会関東・2) 筑波大学

長野県上田市菅平高原において地衣学会主催第12回観察会が開催されましたので、報告いたします。

開催日：2013年11月16日（土）～17日（日）

開催場所：長野県上田市

講師：原田浩氏（千葉県立中央博物館）

参加者：20名（講師含む）

* * *

地衣学会主催の第12回観察会を、長野県上田市菅平高原にある筑波大学菅平高原実験センターにおいて、大勢の参加者を得て開催することができました。

初日の集合前の時間に有志で上田城址公園を含む上田市内を散策して地衣類を観察しました。上田市は真田氏の城下町だったところで、上田城は残っていませんが、上田城址の石垣や古い町並みには昔を思わせるものがありました。上田市は降水量が少ないとのことで乾燥しているのか、期待したほどの地衣は見られませんでした。石垣に生育する多数の地衣や古い瓦に生えているキ

クバゴケなどを観察しました。

上田駅で集合後、参加者の車とバスに分乗して1時間たらずで菅平高原に移動し、観察会の初日は、筑波大学菅平高原実験センター（標高約1300m）の入り口付近の樹木の樹幹に着生している地衣類を観察しました（図1）。キウメノキゴケ、カラクサゴケ、コフキトコフシゴケ、コアカミゴケ（図2）のように山地帯に普通に見られる地衣類に加え、ヤマヒコノリ（図3）



図1. 菅平高原実験センターでの観察の様子（1日目）



図2. *Cladonia macilenta* コアカミゴケ

などの高地でないと見られない地衣種も観察することができました。観察場所の足元には一週間前の雪が残っており16時を過ぎるとかなり寒さが厳しくなりましたが、日没で地衣体の色がわかりにくくなるまで観察を続けました。夕食までの時間は、大学施設の保有する顕微鏡を借りて採集した地衣や持参した標本を観察して時間を過ごしました。

翌日も好天で、菅平高原実験センター敷地内で地衣観察を行いました。オニグルミやサクラの枝や樹幹に着生しているトゲナシカラクサゴケやカラタチゴケを観察した(図4)後、観察会の一行は、菅平高原実験センター内の滝に移動し、その周辺で地衣類を観察しました。湿潤な環境を好むウツメゴケやチチレカプトゴケモドキ、アオキノリ、ウラムゴケ属などの藍藻共生地衣、シラゲムカデゴケなどを観察しました。滝までの途中の岩間の奥に生育しているホソピンゴケの一種を観察することもできました。

最後になりましたが、本観察会にあたり、観察および採取を許可いただきました筑波大学菅平高原実験センター、および菅平高原実験センターのナチュラルリストの方々に感謝いたします。

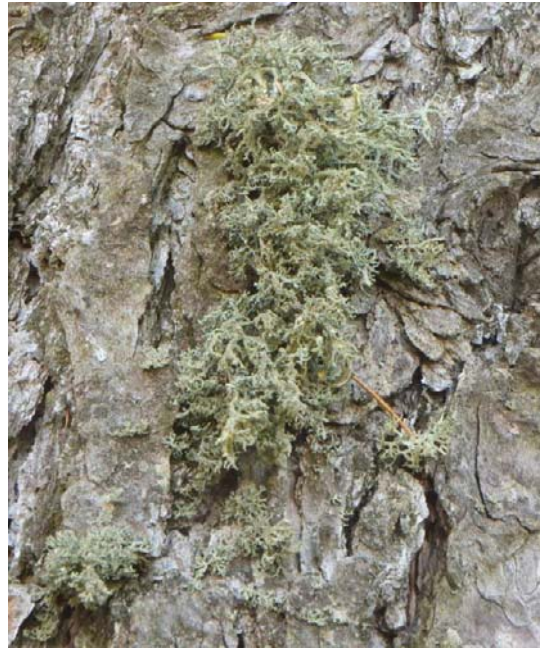


図3. *Evernia esorediosa* ヤマヒコノリ



図4. 菅平高原実験センターでの観察の様子(2日目)



図5. 観察会を終えて記念撮影

菅平高原地衣観察会に参加して

Travel note of the 12th JSL Field Meeting at Sugadaira Highland, Pref. Nagano, Honshu, Japan (16-17 Nov. 2013) / by IZUMI Hiroko

>>>> 泉 宏子：千葉県立中央博物館・市民研究員

1日目、13時20分、上田駅より地元のナチュラルリストの会の方の車に乗せていただいて菅平高原に向かう。モミジ・ハナミズキといった木々の葉が真っ赤に色づいている市街地を過ぎると、紅葉はカラマツの黄葉へと変わっていった。日の光に照らされたカラマツの山々は黄金色になり、青空を背景にひときわ鮮やかで、気持ちもコウヨウしてくる。これが信州の秋色色なんだな、としみじみと感じた。標高が高くなってくと雪化粧した高い山々が見えてきた。左から、根子岳・四阿山・烏帽子岳で、根子岳と四阿山の山麓に菅平があると教えていただく。

40分程で筑波大学菅平高原実験センターに到着。全員集まったところで、施設利用上の説明を聞いた後、15時より菅平高原実験センター周辺の観察に出発。地面には5日前に降ったという雪がまだ薄く残っていたが、風が無いので上着もいらぬほどで寒くはない。根子岳の左側の稜線が見える山麓斜面まで行き、道沿いに並んだカラマツに付く地衣を観察。真っ先に皆の注目となったのはカラマツの根元から50センチ以上も幹を這い上がり広がったコアカミゴケのみごとな群落。子器の赤色が平地で見ると遥かに鮮やかで美しい。小鳥も高原にいる方が平地でみられる同じ種よりも綺麗なことが多いのと重なり、空気が澄んでいると皆色鮮やかになるのかなあ、などとぼんやり思ったり。周りのカラマツにも、裂芽のたくさん付いた小振りのヤマヒコノリヤ、トゲアリ・トゲナシの2種のカラクサゴケなどいろいろ付いていた。原田先生が次々と名前や特徴・見分け方のポイントなどを教えてくださいのメモ、メモ。トウヒの幹には長野県でしか見られていないというヒメキウメノキゴケが付いていた。ナミガタウメノキゴケの形とキウメノキゴケの色を合わせたような地衣だった。さらに進めていくと、落葉

樹の幹になんともおもしろい地衣が出現。シラゲムカデゴケというその地衣は、子器の周りから白いシリアが飛び出していて、肉眼でもそれがよく見える。太陽のような、ウニのような、なんともけったいで、「何これ〜。」と笑ってしまった。

夢中になって観察しているとあっという間に日没が近づき、デジカメも写し難くなってきた。やっぱり雪の残っている標高1300Mの高原。だんだん空気が冷えてきた。指先がかじかんできてメモを取るのが辛くなるし、足先までもじんじんしてくる。4時半を回り、観察を切り上げて菅平高原実験センターに戻ると、黄昏の空、山の稜線右上にぽっかりと白い満月が浮かんでいた。「うわ〜綺麗。」思わず感嘆の声をあげ、数人のメンバーと共にシャッターを切った。

菅平高原実験センターに入り、夕食までの時間、顕微鏡観察をしながら簡易同定会。例のシラゲムカデゴケは顕微鏡で見ると更にユニークだ。子器の周りにシリアを出す意義は何だろう。なんとも不思議。ここでもう一つ感激したのは、ハクフンゴケ。寒くて注意が散漫になり野外で観察しそびれたのでここで初めて目にした。艶やかな緑色の裂片の縁に真っ白な粉芽が、吹きかけられたパウダーシュガーのように付いていて、何とも上品な美しさ。背面と相反して腹面のもじゃもじゃのスカロース型偽根がこれまた凄。地衣類に関心を持ったのは、このような地衣類の色彩の美しさとユニークな形態に魅せられたからであったので、本当にわくわくしてしまった。

2日目。朝食を終え、9時から滝がある所まで山中の観察に向かう。今日も風は穏やかで雲ひとつ無く晴れ渡っている。早朝はマイナス5度位にはなっていたかもしれない外気も、さほど冷たくはなくなっている。北側の斜面を望むと、頂に雪を被った根子岳と四阿山

が青空にくっきりと映えている。高い山の見える景観は気持ちを清々しくさせてくれる。

宿舎から歩いて間もなくの所で観察を開始。赤いやドリギの実が付いたズミヤ、オニグルミ・サクラなどの樹木が続いている。ナメラムカデコゴケ・ナメラカラクサゴケ・カラクサゴケ・コフキカラクサゴケと、連想ゲームのように似た名前が次々と出てくる。日焼けするとナメラムカデコゴケは色が濃くなるが、カラクサゴケは白くなるとのことで、種類により逆の現象が起こるといのは興味深い。葉状、痂状の地衣が多い中、ようやく、小振りだが樹状の（正確には樹状と葉状の中間的とのこと）カラタチゴケが出てきた。そのそばに、同じく小振りで皿状の子器がだいぶ大きいカラタチゴケがあり、一見別種のようなだったが、これも同種ということだった。山道を下っていくと、木にぼつんと一つ別のカラタチゴケが付いていた。下を向いた形に付くのが特徴というツツシカラタチゴケとのことで、いずれもよく似た外見だった。

更に山道を下っていくと斜面にマグマが噴出して開いたという大きな溶岩洞穴があった。先が上がって洞穴中を調べていた方々が珍しい地衣を見つけたらしい。順番を待って最後の方に上がって行ってビックリ。美しい緑の蛍光色をした地衣が岩に手の平程の大きさに付いていた。ルーペで覗くと繊細な子器がよこによこに出ていて、そのため離れて見ると全体がベルベットのように、触れたくなくなってしまいそうな地衣だった。

コフキホソピンゴケという名だそうだが、それはあたかも溶岩洞穴に隠されていた宝物のように思えた。それにしても、このような場所に入り見つけられた方々は素晴らしいと思った。

目的地の滝は、6~7M程の高さで、さほど飛沫をあげずにザーザーと水を落としていた。大明神の滝という名で秘瀑とのこと。根子岳と四阿山の山間から滲み出てきた水で、硫黄分が多く酸性のため魚は棲めないのだと、地元のパチュアリストの会の方が説明してくださいました。滝の周りの岩には、ウスツメゴケ・チチレツメゴケ・ウラミゴケ・カプトゴケ・アオキノリなど、湿潤な場所を好む地衣がいろいろあった。ウラミゴケとは妙な名前と思ったら、子器が裏側に付いているからとのこと。なるほど、ツメゴケとは子器の付いた面が反対に反り返っている。滝周辺で正午過ぎまで観察した後は一路菅平高原実験センターへと戻った。そこで昼食を終えた後は、集合写真を撮って、散会となった。

天候にも恵まれ、信州の晩秋の美しい景色を堪能した。そして、菅平の高原で人知れずひっそりと生息する珍しい地衣・ユニークな地衣・美しい地衣にいろいろ出会うことができ、生息環境を知ることもできた。たくさんの感動と知識を得た有意義な二日間であった。

今回の観察会にあたり御尽力くださった、世話人の皆様・地元のパチュアリストの会の皆様・講師の原田先生に、心から感謝申し上げます。

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

- *Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 123, pp. 457-460: eds. Kinoshita K., Komine M. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 15 Feb. 2014.

日本地衣学会ニュースレター 123号

発行日：2014年 2月 15日

編集：木下 薫・小峰 正史・原田 浩

発行者・発行所：日本地衣学会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

微生物工学研究室

©2014 日本地衣学会 (© 2014 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。